

佐治町熊野神社遺跡 ガイドブック

① 入口付近（五輪塔、仁王門）

熊野神社遺跡は、佐治川右岸河岸段丘上の佐治町大井に位置し、大井聖坂遺跡、大井3号墳、家の下モ遺跡、対岸には貝尻古墳、貝尻遺跡があります。



また、古来より「大井千軒跡」と呼ばれてきた古い歴史を有する地域です。

熊野神社遺跡は、神仏習合の遺跡です。神仏習合とは、明治時代初めまで続いてきた信仰で、日本古来の神の信仰と仏教信仰を調和する考えのことです。深い森と溪谷のたたずまいが佐治の中でも神秘性を感じる所の一つです。

熊野神社遺跡は、今から1300年前の飛鳥・奈良時代に積石塚古墳が造られたことで始まりました。



鎌倉時代に、和歌山県熊野大社から熊野信仰が取り入れられ神社、仏閣が建立されました。和歌山県熊野三山の神々を勧請（迎え入れること）したというのは、江戸時代の初め鳥取藩の学者、小泉友賢が当地を訪れ、記録した

「稲葉民談記」に書かれたお話です。

また、この遺跡は、修験道の修行道場でもあります。修験道では、熊野の山に入るということは、いったん、あの世に入り、死んだことにして聖地を巡礼して、またこの世に生まれ変わって戻るといった意味があります。

その後一旦廃絶し、約 300 年位人々に忘れられていたと思われます。

江戸時代に入り、恐れを知らない人が入り、石仏、道、堂が整備され参拝者が増加したと思われます。

※「稲葉民談記」に、寛文 9 年（1669）嗚呼の者ありて、この谷に分け入り、木を刈り、路を開きしより、土人尋ね入りてこれを見るに、昔の路、巖然として、石にて作りし、観音の仏形、山々、谷々に満ちて退くなし。堂の礎、石の窟、池、砌磬石さながら残りて、そのまま三山の体を写せり……………

人々を病気や災害から救済する聖地、とりわけ学問や安産に効力のある信仰、修行の場として栄えました。

熊野神社遺跡は明治時代まで栄えましたが、大正 5 年に口佐治神社に合祀され途絶えました。

明治元年「神仏分離令」明治 5 年「修験道禁止令」が出されましたが神社遺跡は維持されていました。

五輪塔は、宇宙の構成要素



を「地・水・火・風・空」の五つと説く仏教思想に基づき平安時代に創立されたモニュメントの一つです。（鎌倉時代以降、武士により盛んに造立）入口にある五輪塔は、東方に向けて配置されていて、簡素で整った形式で大型のものです。鎌倉～南北朝時代のものと考えられます。

この仁王門石仏をスタートに17体の羅漢仏（石仏）があります。

羅漢とは、仏教の言葉で聖者、尊敬を受ける人の意味です。

この世に永久に生存して末世において、滅びる仏教を再び興すことを託された仏で、人間らしい表情で彫刻されることが多い仏像です。



② 積石塚古墳付近（古墳及び石室内の石仏）

朝鮮半島の積石塚との関係をうかがわせる古墳です。通常は、日本風のアレンジされた古墳が多いのですが、この古墳は朝鮮半島の形式をそのまま表しています。

はるばる日本海を渡って、米と鉄を求めてやって来た朝鮮半島の人々が住みついて、積石塚を築いたとも推測されます。妻木晩田遺跡、上寺地遺跡、上淀廃寺遺跡との関連が考えら



れます。

一号墳は、直径6m、高さ2m平面は八角形で人頭大の川原石で構築されており、断面は3段以上築かれています。

東側が開口し、横穴室の石室があり、石室中央に石仏らしきものが現存します。

二号墳は、全体像の把握が困難ですが、直径11m、高さ3mで古墳の裾(すそ)に自然石の巨石が散乱しています。入口は朝鮮半島の五墓に多い南向きになっている可能性が指摘されています。

積石は2段以上築かれていて、下段の積石が再利用され、石仏の安置所として二か所利用されています。朝鮮半島の積石塚、とりわけ新羅、高句麗との関係を大いにかがわせる古墳です。

③ 巨岩付近（巨岩及び神蔵）

古代において巨岩は、神霊のとどまる場所とされ、神々の座す場所として崇拜されました。

この岩は熊野神社遺跡の中で一番大きな岩と考えられ、本家熊野の「ことびき岩」をあてはめられていると思われます。



神蔵は、神が寄ってくるように、巨岩の上であり、高さ84cmで屋根は切妻で丸み

があり、鯉木が架かっています。

巨岩の下に池と思われる遺跡もあります。

本家和歌山県の「ことびき岩」は、神武天皇が九州から東征し、近畿地方に上陸するとき目印になった所とされています。

この巨岩は、長さ20m、高さ8m、幅6m（約2,500トン）で、この付近最大の巨岩と考えられます。



この場所は、前に神の池、後ろに積石墓、羅漢像もひしめき、自然の神秘さを感じる場所の一つです。

④ 本殿付近（小鳥居、板碑、三重塔、本殿跡地等）

神社の中心です。小鳥居を潜っていくと本殿があります横には天神さん跡、後ろには供養塔（板碑）が建っています。



誰が何のために造ったかと言うことが興味深いところですが、板碑、石塔、神蔵、鳥居など当時の日本でも珍しいモニュメントがそろっていることから、やはり、中央とつながりのある人物でないと出来ないのではないかと考えれば、鳥取県史に紹介されている、鎌倉時代の地頭佐

治氏が、和歌山熊野大社から熊野信仰を取り入れ神社、仏閣を建立したと推則されます。

今でも小鳥居を潜ると学問、安産に効力があると言われてています。

社殿中央に本殿跡があり、日本創生の神、イザナギ、イザナミの両神が祀られていました。

中央に豆石があります。熊野では、白い浜石を神への手向けとし、境内に白石を置く風習があります。「鬼の目と



呼ばれる渚の小石は、常世からの福をもたらし、家に宿る病魔や外から入る邪悪なものを祓う力があると信じられていました」

南北朝時代の供養塔(板碑)が造立されています。板碑とは、鎌倉、

室町時代に、死者追善、生前の逆修供養のため建立した石塔である。上部に梵字が刻んであります。

籠り堂は茅葺屋根の建物が建っていた。(江戸期に建築、昭和まで現存)

三重塔が本殿下の社地に三基並んで立っています。中央のものは、195cm、南のものは196cm、北のものは186cmで、いずれも同時期に製造されたものです。(南北朝前中期)



四人仏は、切り立った岸壁の窪みに祀られています、阿弥陀仏様の手のひらに乗っているようには見えませんか。その上には観音様の顔面を思わせる巨石が位置しています。



一つずつ表情を見てください。放心感（ぼんやり）、無私（私心のない）の笑い、悪を暴く（怒った）顔など、人間らしい表情が読み取れ、親しみを感じませんか。

なお、辺りの圧倒される山肌、岩壁は、胎内くぐり、修行の場であったと思われます。

奥の院より上流に、流れ滝、宝篋印塔の台座、おとが滝、その斜面登ること30m、巨岩の前に羅漢の石仏一体があり、さらに川を上れば、那智の滝が見えます。（高さ12mの規模であるが滝壺は土砂等が堆積し、当時の原型を損ねている）

これより奥は、道もなく非常に危険ですし、まさに、修験道の行場です。